

めて少ない。これに対し、TK217型式での坏G蓋はしっかりとした宝珠形のもので、器高も高く、口径も10cm以内のものが主流のようである。このような様相の違いは当窯跡群のものがやや後出する可能性をもっているが、この時期の坏G蓋は地域によって違いがあるようで、地域差として捉えられるものかもしれない。以上から、畿内の様相とそのまま対比できるものではないかもしれないが、当期の上限はTK217型式の中にあることはまず間違いなく、その下限についてもTK217型式がやや幅をもたせて考える傾向にあることから、その型式の中で収まるものと考えたい。<sup>(25)</sup>

以上、陶邑窯との対比から、その併行関係を述べてきたが、その差異から南加賀古窯跡群の特徴を述べてみたいと思う。まず、I期であるが、この時期には作りが雑で器肉の厚いかにも稚拙な技術によって作られたようなものと、作りが丁寧で熟練した技術によって作られたようなものが存在する。これは須恵器技術の導入がこの時期に行われたことを物語るものであり、新しい技術の導入がもたらした特徴と言えよう。<sup>(26)</sup> II・III期においては、I期のような技術の差は認められず、やや地域色的なものをもち始める。坏身の口縁端部が内傾する段をもつものから丸く仕上げるものへと変化していく状況は陶邑のものと大きな違いはなく、ほぼ期を同じくして変化しているものと考えられるが、口径の大きさやや深身である点では比較的古い様相を残す傾向をもち、無蓋高坏では1段スカシから2段スカシへの変化の段階で、独特の器形（無蓋高坏B類）を作り出している。また、この時期には畿内の器形のものとは異なる口縁部の長い坏身C類が一定量存在し、尾張猿投窯からの影響があったと予想したい。<sup>(27)</sup>

生産が安定してくるIV期以降になると、蓋坏や高坏に古い様相を残す傾向が顕在化する。蓋坏については坏蓋の口縁端部が丸く仕上げるものがIV期から出現してくるものの、微弱ながらも段をもつものがVI期まで残り、丸く仕上げるものに統一されるのはVII期になってからである。坏身の口縁部高についても比較的高いものが目立ち、口縁部の強く内傾するものはVII期以降に出現してくる。全体の法量としては口径が縮小していく状況は陶邑のものと大差ないと思われるが、V～VII期と器高の高いものが目立つ。しかし、調整の簡略化は早い傾向にあり、IV期には調整の簡略化が目立ち始め、VI期には削り調整を施さないものにほぼ統一される。無蓋高坏はIV期からいわゆる長脚2段スカシが出現してくるが、3方向に穿つものがVI期まで残り、2方向に穿つものはあまり一般化しない。

以上の古い様相を残す傾向は、製品の中で主要な位置を占める蓋坏や高坏に見られるのであるが、これに対し生産量の少ない貯蔵形態の器種においては、新しい器種や器形を比較的早く受け入れる傾向をもつ。それは甕の器形変化や長頸壺の出現時期、また、VII期に出現する宝珠形のつまみをもつ坏G器種で、これら新しい器種・器形などの出現においては畿内と大きな時間的格差をもっていないと思われる。

## 5. 南加賀古窯跡群成立の窯跡分布と窯の動き

この章で取り上げた古墳時代の窯跡は、戸津町から二ツ梨町にかけての平野を望む丘陵斜面つまり南加賀古窯跡群の存在する低丘陵の北西端、二ツ梨オオダニを挟んだ両側の丘陵斜面、那谷町から松山町にかけての動橋川流域丘陵斜面つまり南加賀古窯跡群の存在する低丘陵の南東端の大きく分けて3ヶ所に分布する。この窯跡を時期別に出現期（Ⅰ・Ⅱ期）、安定期①（Ⅲ期）、安定期②（Ⅳ・Ⅴ期）、発展期（Ⅵ・Ⅶ期）の4期に分けて各期の窯跡の分布と動きについて述べてみたい。

（出現期）この時期の窯跡は二ツ梨東山4号窯跡（Ⅰ次床）が確認されるのみであるが、二ツ梨殿様池窯跡においてⅠ期と思われる須恵器が採集されており（近間強1988）、当期の窯跡が存在する可能性をもっている。以上の2基の窯跡は二ツ梨オオダニの入り口部分周辺の地域に分布し、この地域で須恵器生産を開始されたとみてほぼ間違いない。生産規模は消費地での当期の南加賀古窯跡群産須恵器がまだ少ない状況にあることを考えれば、小規模であることは確実で、流通圏もあまり広くないと思われる。

（安定期①）当期の窯跡は出現期に存在した二ツ梨東山4号窯跡と二ツ梨殿様池窯跡（3基？）の他、二ツ梨豆岡山3号窯跡、戸津六字ヶ丘5号窯跡の約6基が存在し、出現期に存在した二ツ梨オオダニ周辺から戸津オオダニの入り口部分の範囲で分布する。当期は出現期に比べて窯跡数が増加し、分布する範囲も二ツ梨オオダニの入り口部分から戸津オオダニの入り口部分まで規模をやや拡大する。しかし、この拡大は大きなものではなく、基本的には出現期の分布地域と変化はない。当期は出現期で先駆的に生産を開始した地域において、その生産が安定し、規模を拡大して行った段階として捉えられるもので、生産の充実期であり、発展期ではない。また、当期は消費地において、須恵器が増加する時期でもあり、これまでの搬入品が主体を占めていた状況からほぼ在地産に統一される状況へと変化している段階で、流通圏も拡大している。

（安定期②）当期の窯跡は二ツ梨東山窯跡（1・3・5号窯跡）、二ツ梨峠山窯跡（二ツ梨10号窯跡など3基？）、二ツ梨豆岡山1号窯跡、二ツ梨殿様池窯跡（この時期の須恵器が採集されているようであるが、詳細は不明）が存在する。窯の基数や分布範囲はこの前の時期と変化していないが、その中心が二ツ梨東山窯跡とそこからオオダニを挟んだ向こう側に存在する二ツ梨峠山窯跡の区域にあり、比較的集中した生産を行っている。

（発展期）当期は出現期から安定期と窯場の中心であった二ツ梨オオダニ周辺の地域から那谷町・松山町周辺の南加賀古窯跡群南東端の地域と林町・戸津町周辺の南加賀古窯跡群北西端の地域に窯場が分散・拡大する。二ツ梨オオダニの区域は二ツ梨峠山窯跡で1基（須恵49号窯跡）確認されるだけで、安定期から規模をかなり縮小している。これに対し、窯跡群の南東端と北西端の区域は開始と同時に精力的な生産を行っているようである。南東端の区域は那谷金比羅山窯跡（1・4・6・7・8号窯跡）と分校窯跡（3号窯跡の他4基確認されている）、松山窯跡（3基確認されているが、詳細は不明。ほぼ分校窯跡と同様の時期と思われる）が存在し、この時期以降、近隣の横穴古墳群が消滅する7世紀末頃まで活発な生産を行っている。北西端の区域は南東端区



I・II期の須恵器窯跡



III期の須恵器窯跡



IV・V期の須恵器窯跡



VI・VII期の須恵器窯跡

第83図 古墳時代須恵器窯跡分布図 (S=1/5,000)

域ほど窯跡の基数が多くないが、林タカヤマ窯跡で3基、林オオカミダニ窯跡で2基、戸津六字ヶ丘窯跡で3基の窯跡が存在し、以後林周辺では衰退するが、戸津六字ヶ丘窯跡では8世紀初頭までここを基盤とした生産が行われ、以後主体を戸津オオダニ周辺の区域に移していく。

以上、古墳時代の窯跡の分布とその動きについて、各期をとおして見てきたが、この窯の動きから見た画期は明らかに発展期の段階で、それまでの須恵器生産組織を再編させるかのような動きを示している。その背景には当窯跡群南東端に位置する那谷・分校・松山の窯跡グループの南側に存在する法皇山横穴古墳群や栄谷丸山横穴群の築造があると思われ、窯の出現から消滅そして隆盛期と両者ともほぼ同様の在り方を示している<sup>(28)</sup>。当窯跡群の窯場の移動がこの2つの横穴群のみに起因するとは考えられないが、少なくとも南のグループの窯跡はそのような政治的な要因によって移動されたと予想できる。

## 6. まとめ

これまで、須恵器の編年と畿内との対比、窯の動態について述べてきたが、3の編年区分のところで述べた編年の画期と各段階の内容について、ここでもう一度まとめておこうと思う。

南加賀古窯跡群の古墳時代をその出現から7期に区分し、その中でⅢ期からⅣ期への変化とⅥ期からⅦ期への変化を画期として設定しているが、南加賀古窯跡群の出現も土器組成の中で見れば、一つの画期として設定できる。南加賀古窯跡群出現の画期とⅥ期からⅦ期への古代土器組成へと変化していく画期を大きな画期として設定し、その中間のⅢ期からⅣ期への画期は小画期として設定する。また、ここでは古墳時代の編年として、Ⅶ期を含めて行ったが、Ⅶ期は古代の土器組成がここから出発するという点で、今回の須恵器編年に属すべきものではないかもしれないが、主要器種は依然として古墳時代の組成であり、その転換期としてⅦ期も含めて行った。また、Ⅶ期の画期は古墳時代と古代の画期という面でも大きな画期と言えるものである。

南加賀古窯跡群の出現は、多くの人が指摘するように、TK47型式併行のⅠ期にあることはほぼ間違いないうで、この時期は土師器においても画期として捉えられており、古墳時代の土器全体を大きく転換させる画期の意味は大きい。このように、地方において土器様相を一変させる在地窯の成立については、当然在地首長層の中央への働きかけと強い結び付きによって招来せられたものと考えられるが、その経営・管理にあたってもそれに近隣する江沼盆地・三湖台地域の首長層が大きく関与していたことはほぼ間違いなことだろう。在地首長層が窯業生産を招来し、掌握することがどれだけの利点があったか推測する術はないが、河村氏(河村1983)が「領域内諸階層は、その入手において首長権への依存を強めざる得ないであろう」と指摘するように、古墳祭祀に不可欠の要素であった須恵器の供給を掌握することが、諸階層に対する首長層の優位性と、他地域の首長層間の友好関係を表す物資として使われたのではないだろうが。いずれにしても、在地の窯業生産活動は政治的な手段として使われたことは間違いのないことであろう。在地での窯業生産の開始には、先進地からの工人集団の移入がなければ成立不可能なことであるが、